

積極的な「受注→外注」で着実に収入を得る

基本データ

- 名称：平成の里
- 運営法人：社会福祉法人 東村山けやき会
- 施設長：鈴木不二子 ●住所：〒189-0002 東村山市青葉町 3-30-7
- 電話：042-397-5966 ●URL：http://www.hmkk.or.jp/

【施設データ】平成 21 年時点

- 開所年月日：平成 3 年 4 月 1 日
- 施設種別：精神障害者通所授産施設
- 利用者数・職員数
 - 利用者：定員 27 人（男性 19 人、女性 8 人）
 - ・身体障害者手帳 1 人（男性 0 人、女性 1 人）
 - ・愛の手帳 3 人（男性 2 人、女性 1 人）
 - ・精神保健福祉手帳 23 人（男性 17 人、女性 6 人）
 - 職員：7 人（うち、就労支援事業担当職員 1 人）

●作業内容

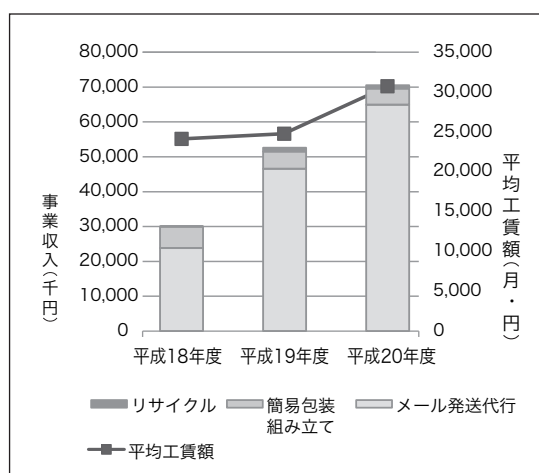
＜受注＞・メール便の発送代行業務 ・簡易包装組み立て業務（ボールペン関係の箱折り、シールはがし、ケーキ箱折り） ・リサイクル資源回収

●事業収入と平均工賃の推移

平成 20 年度の一人当たり月額平均工賃は 30,734 円と平成 19 年度の都における一人当たり月額平均工賃 14,704 円の 2.1 倍となっており、3 ヶ年続けて工賃がアップしている

事業収入・工賃の推移

	平成 18 年度	平成 19 年度	平成 20 年度
平均工賃額（円／月）	24,126	24,774	30,734
メール発送代行（千円／年）	23,802	46,536	64,966
簡易包装組み立て（千円／年）	6,191	4,991	4,534
リサイクル（千円／年）	71	1,061	1,041
事業所全体（千円／年）	32,052	53,433	71,505
利用者数（人）	31	30	29



●工賃の決め方

- ・5 段階の時間給（ランク別 280 円～ 410 円）
- ・作業に従事した時間に基づいて計算
- ・ランクについては、作業能力、協調性、出席率、貢献度等についての職員全体の評価による

●賞与 年 2 回

「平成の里」は こんなところ

平成の里は平成3年に開設された精神
障害者通所授産施設。



大量受注と外注で工賃アップ

「平成の里」は平成3年に開設された、精神障害者通所授産施設。運営している社会福祉法人東村山けやき会は、同じ年に東村山けやき家族会によって設立されたもので、平成の里のほかにも精神障害をもつ人のための生活支援センターやグループホームを運営しています。

平成の里の主な作業は、メール便の発送代行業務や簡易包装組み立てなど。また、近年ではリサイクル資源回収もおこなっています。

作業室を訪れると、これからの作業を待つたくさんの書類や荷物が所狭しと積まれています。利用者はチラシの挟み込みのグループ、簡易包装組み立てのグループなどに分かれて、順に作業をこなしています。でも、精神障害という特性上、スピーディーにたくさんの数をこなすには困難も。納期を守るため、かつては職員が三日三晩徹夜するということもありました。そこで平成の里では現在、大量の受注を取り、平成の里で消化できない部分は、ほかの障害者施設に積極的に外注に出して収入を得るという方法を取っています。

外注するといっても、お互いに利益を分け合うような価格で、平成の里にとっての取り分は少なく、平成20年度の粗利益率はわずか19%です。でも、もともとのパ



メール便の発送代行作業。品物を封入・封緘して
発送します。



作業室には、作業を待つ書類や荷物がたくさん。
利用者はグループに分かれて作業します。

イが大きいので確実に利益になっており、結果、同年の平均工賃は月額 30,734 円と平成 19 年度の都の一人当たり月額平均工賃 14,704 円の 2.1 倍、しかも 3 カ年連続でアップしています。

利用者の障害特性を考え、施設の中には納期に余裕をもって仕事を受注するところも多いのですが、平成の里はむしろ納期が短いほうがよいと考えています。

「納期まで時間があると、その分大量の荷物も施設内を占拠することになるので」と、社会復帰指導員の I さんは説明します。企業の中には、荷物を作業所に長期間置いて、倉庫代わりに使っているように見受けられるところも残念ながらあります。それを避けるには納期は短く、かつ速やかに外注に出して、作業所内に荷物が滞留しないようにしようと平成の里は考えたのです。

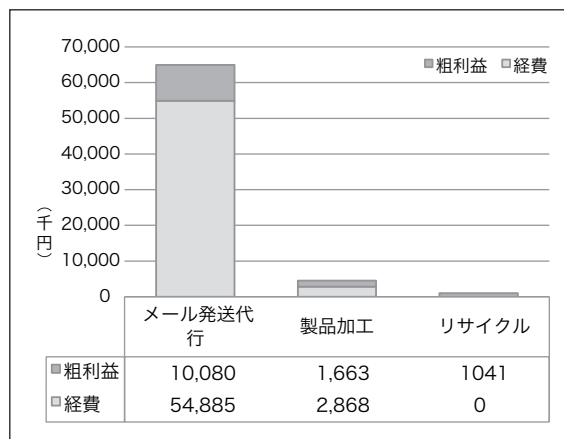
外注先は、市内、23 区内、埼玉県新座市などの作業所ですが、確実に仕事をこなしてくれるところを入づてに探しました。5000 個の依頼に対し、「100 個でいいですか?」「納期に間に合わなくていいですか?」という答えが返ってくる施設は、残念ながら対象外です。

リサイクル資源回収事業は、企業等から古紙やリサイクル可能なものなどを回収し、それをリサイクル業者に持って行き、お金に換えるという内容で、3 年ほど前に始めました。今後も工賃をアップしていくには、新たな受注先と外注先の確保が必要です。平成の里では、I さんが企業等に受注の営業に回り、また外注先探しのため福祉施設も回っています。両者を行き来して感じるのは、企業は福祉のことをよく知らず、一方で福祉側は企業のやり方や経営というものをよく知らないということです。

『社会福祉法人って何ですか?』から始まる企業もあれば、安く社会福祉法人を使おうと思っているような企業もあります。一方で、福祉の側も、一般企業なら受けられないような安値で仕事を受けてしまったりと世間知らずといえる部分もあります。自分も含め福祉の人間は企業経営や営業技術の勉強が必要だと思うし、社会福祉法人が企業に営業に行っても信用してもらえるよう、行政のバックアップなどもあればよいと考えています。」(I さん)

各作業の工賃と仕事状況

各事業の内訳



メール便の発送代行業務

▶ 営業強化が課題

メール便の発送代行は、平成の里の主要事業です。これまで主に大手物流会社から作業を受注しており、そのほかに平成の里自身が営業・獲得しておこなっているダイレクトメール（DM）などの発送代行業務もあります。

大量に受注し、利用者にできない量は外注するという方法を採用していますが、一方では丁合機や宛名印刷機をそろえるなどの大きな設備投資もおこない、作業の効率化や顧客のニーズに応えるようにしてきました。

ところが今年に入り、これまで最大の受注先であった大手物流業者が都合で撤退し、平成の里にとって大きな収入減となっています。

この仕事の中には、書店やコンビニなどでよく見る雑誌を定期購読者宅などに発送する仕事もあり、それに携わっているということに利用者はやりがいも感じていました。「淡々とした作業の中にも、ふと見出す楽しみというのがあるんです」とIさんは言います。雑誌なので、厚いし

丁合機



紙折り機



カンプレッサー



丁合機や梱包マシン、紙折り機、缶などをつぶすカンプレッサーなど、作業効率を高めるため各種設備が充実。補助金で購入したものもあります。



配布する冊子にチラシをセットしていきます。

重いし、扱うのは大変なのですが、その分、「今ここまで作業が終わった」という進行状況が目に見えやすく、やり終えた後の達成感もあったといいます。

大手物流会社の仕事がなくなった分、新たな受注先の獲得が大きな課題です。Iさんが営業に回ってはいますが、一般のDM会社のように一軒一軒電話でアポイントをとって仕事をとるということは、いまの職員数では限界があります。かといって利用者が自分で電話営業できるかというと、まだハードルが高そうです。また、仕事を少しでも取りやすくするため、DM作業の価格は企業等よりも安く設定していますが、逆に「安すぎる」と不安に思われてしまう場合もあるのが悩みです。

いまはチラシの挟み込みを受注したり、ほかのDM会社や障害者施設が獲得した仕事を回してもらったりしていますが、減収分を受注拡大で何とか埋めなければいけません。

また、今後受注をとるに当たっては、「プライバシーマーク」取得の必要性にも迫られそうです。このマークは個人情報保護の体制が整っている事業者に付与されるもの。今後企業は、プライバシーマークのあるところのみDM作業を受注するようになる可能性も考えられるので、平成の里としてもこのマークを取得できればと考えていますが、取得には高額な費用がかかります。

プライバシーマークを取ることができれば、利用者もより引き締まった気持ちで、誇りをもって作業に当たれるかもしれないとも考えています。

簡易包装組み立て業務

▶ 中間業者がなければ箱折りは高収入

平成の里では、ケーキ箱の箱折り、ボールペン商品の箱折り、商品のシールはがしなどもおこなっています。この作業でもやはり、大量受注してほかに外注するという方法をとっています。

箱折りは一般的に利益が出ない仕事と言われていますが、ケーキ箱の箱折りはケーキ店から直接受注しており、中間業者が入っていないので高収入となっています。食品にかかわる箱なので、利用者は衛生面を徹底して作業に当たります。仕事が最も多いのは、クリスマスや卒業・入学のシーズンなどケーキの売り上げが伸びる時期。ただしここ最近は、不景気の影響からか箱折りの仕事は減っています。

景品用に名入れするため、ボールペンのシールを一枚一枚はがす作業。



リサイクル資源回収

▶「ゴミがお金になる」と知って

リサイクル資源回収は、古紙やリサイクル可能なものを回収し、買い取り業者にもっていきお金に換えるという事業です。現在従事しているのは、Iさん含む職員2人と、利用者1人。リサイクル事業は外注が不要で、コストもあまりかからないというのがメリットです。

事業を始めたのは3年ほど前。メール便の仕事で物流会社に行った際、偶然そこにたくさんの雑誌が無造作に積まれているのをIさんが目にしました。不思議に思って尋ねると、「不要になったのでお金を払って処分するところ」とのこと。古紙回収業者に持っていけば逆にお金になるはずなので、その古紙の山を平成の里で引きとることにしました。これがリサイクル事業の始まりです。以後、積極的に営業して仕事を増やしてきました。

「企業に出かけた際、『何か困っていることはないですか』と聞くんです。それで、『大量にパソコンや机を廃棄したいけど、処理に困っている』という話が出てきたりすると、『じゃあ、うちが引き取りますよ』と。」(Iさん)

普段何気なく見過ごしているものが、実はお金になる可能性もあるんだと気付いてから、仕事を探す視野も広がったそうです。

回収したものは、すぐに売らないと平成の里の敷地がいっぱいになってしまいます。その点で重要なのは、身近に買い取り業者があるということ。探した結果、幸いにも近隣にあることが分かりました。

古紙は古紙を引き取ってくれるところ、パソコンなどの部品は部品を引き取ってくれるところに持って行っていますが、主に利用しているのが家電から家具までいろいろなものをひとまとめで買い取ってくれる業者。運送が一度で済むので手間がか



外にもたくさんの荷物が。毎日大量に届くので、リフトを使って移動させます。



カゴには、回収した雑誌などの古紙。リサイクル業者に持ちこんでお金に換えます。

かりません。

リサイクル品の行く先は、主にアジアの国々で、特に近年は中国やインドの好景気でリサイクル事業の収入は好調です。しかし、つい最近まで売っていたものが売れなくなったりと、需要の変動が激しい業種でもあるので、一步読みを間違えればゴミを大量に抱えてしまう恐れもあります。回収に当たっては、時勢を把握し、売れるものを引き取るよう注意することも必要です。

工賃がアップしたポイント

▶大量受注して外注を有効活用

積極的に営業をかけて大量に受注、自分のところで作業しきれない分はほかの障害者施設に外注するという方法で、効率的に仕事を回しています。利益率は小さいものの、パイが大きい分得られる金額自体は多く、収入アップと工賃アップにつながっています。

▶新事業を開拓する姿勢がある

どこかに眠っている仕事はないか、何か困りごとを抱えている企業はないか……と常にアンテナを張る姿勢が、リサイクル事業などの新事業開拓につながっています。

今後の課題

▶行政からのバックアップ

DM 発送などの仕事を今後受注していく上で、プライバシーマークの取得も必要になりますが、費用が高額なため行政などの補助が望まれます。

また、営業に行っても、企業の中には社会福祉法人が何であるかすら知らないところもあります。何らかの形で行政がバックについてくれれば信用につながり、仕事も受注しやすくなると考えられます。

▶地元のネットワークの強化

平成の里では、自ら多くの仕事を受注し、自分たちだけではこなせない部分を外注に出すことで地域全体で工賃アップを目指す動きをつくり出してきました。このような授産施設の協働は、比較的大規模の社会福祉法人では法人内部での機能分担として現実性があっても、小さな作業所同士では意識の共有や、あるいはコーディネーターとして動き回れる人材の確保も難しく、現状では、職員の個人的な力量に依存している営業などの機能の組織化が課題となっています。

パソコン事業からスタート ネットワークを広げ どんな仕事も受けて次につなげる

基本データ

- 名称：ワークショップ・かたつむり
- 運営法人：社会福祉法人かたつむり会
- 施設長：森一生 ●住所：〒166-0012 杉並区和田 1-5-18 アテナビル 2 階
- 電話：03-3381-4278 ●URL：http://www.jcpa.net/kata/

【作業所データ】平成 21 年時点

- 開所年月日：平成 9 年 4 月 14 日
- 施設種別：身体障害者小規模通所授産施設
- 利用者数・職員数

利用者：定員 17 人（登録 19 人：男性 15 人、女性 4 人）：

- ・身体障害者手帳 11 人（男性 9 人、女性 2 人）
- ・愛の手帳 6 人（男性 5 人、女性 1 人）
- ・精神保健福祉手帳 2 人（男性 1 人、女性 1 人）

職員：7 人

●作業内容

<自主生産>・ビーズアクセサリ、手工芸品の製作等

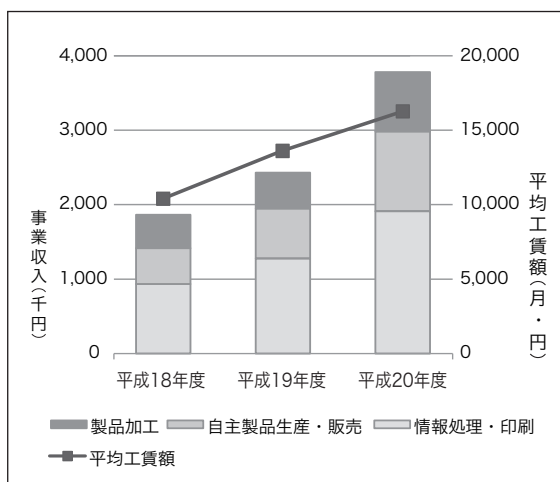
<受注>・情報処理事業（パソコンによるデータ入力、ホームページや名刺の作成等）
・軽作業（封入、ラベル貼り等）

●事業収入と平均工賃の推移

平成 20 年度の一人当たり月額平均工賃は 16,265 円と、3 ヶ月続けて工賃がアップし、平成 19 年度の都における一人当たり月額平均工賃 14,704 円を 3 ヶ年続けてアップした。

	平成 18 年度	平成 19 年度	平成 20 年度
平均工賃額（円／月）	10,405	13,613	16,265
情報処理・印刷 （千円／年）	935	1,277	1,911
自主製品生産・販売 （千円／年）	480	672	1,073
製品加工（千円／年）	449	480	797
事業所全体（千円／年）	1,865	2,430	4,051
利用者数（人）	31	30	29

事業収入・工賃の推移



●工賃の決め方

85%は作業時間に応じて配分。残り 15%は成果・能力に応じて配分している。

●賞与 なし

「ワークショップ・かたつむり」は こんなところ

「ワークショップ・かたつむり」は、杉並
の住宅街にあるビルの2階にあります。



パソコンを使った作業所として誕生

「ワークショップかたつむり」（以下、かたつむり）は平成9年、当時としてはまだ珍しいパソコンを使って作業をする通所授産施設として誕生しました。

きっかけは、障害者職能訓練センターの卒業生たちの働く場づくりにありました。せっかく職業訓練を積んで、パソコン技術からビジネスマナーまで身につけたのに、雇ってくれるところがない。ならば、自分たちで働く場をつくらうということでこの施設を開設したのです。「かたつむり」という名前には、「ゆっくりでも着実に前に進む」という期待が込められています。

最初は身体障害のある5人でのスタートでしたが、その後、知的障害や精神障害のある人も通所するようになり、現在はパソコン業務（情報処理事業）のほかにビーズアクセサリーや織りなどの手工芸品の自主生産、封入・ラベル貼りなど軽作業の受注もおこなっています。

作業スペースでは、情報処理事業の人も、手工芸品製作の人も、軽作業担当の人も、一緒に作業しており、職員の目が行き届きやすくなっています。利用者は皆さん和やかに作業を進めている様子。でも、しばしば気分のムラやお互いの相性の違いなどから、けんかも起きるのだとか。職員はときに利用者をなだめたり落ち着かせたりしながら、作業をサポートしています。



パソコン作業も、手工芸づくりも、封入などの
軽作業も、同じスペースでおこなっています。

収入で最も大きい部分を占めているのは、やはり情報処理事業です。とはいえ、パソコンの技術・知識をもっているのは全利用者中5人だけ。それでも工賃の85%は時給で計算され、本人の成果や能力が評価される部分は15%のみです。

しかし、これでも以前よりは能力給の部分が増えたほうで、かつては100%時給で計算していた時代もありました。日によっては仕事がないという人もあり、そうした人も忙しい人もまったく同じ給与では公平さに欠けるため、10%、15%と徐々に能力給を上げてきたのだそうです。「もっと能力給の部分を増やそうかと利用者たちに聞くのですが、このままでいいという答えが返ってくるんですよね。もし自分たちが仕事ができない立場になったら、逆に不安になるという思いもあるようです」と施設長の森一生さんは言います。

なお、能力給を決めるにあたっては、利用者を点数化して評価するのではなく、日頃の作業に対する取り組みや他の利用者との関わり等を勘案したうえで、これを職員会議で協議して決めています。

ネットワーク生かし工賃アップ

かたつむりの収入の推移を見ると、平成18年度から3ヵ年で上昇しており(52ページのグラフ参照)、これに並行するように工賃もアップしています。理由としては平成20年度に企業からコンスタントなデータ入力の契約が入ったということも大きいですが、それだけではありません。

平成18年から、地元・杉並区の主催で「すぎなみ仕事ねっと」というサイトが開設されています。これは、区内の授産施設が自分の商品を販売したり仕事を受注したりできるサイトで、平成20年からは「大手ポータルサイト」にも出店しています。かたつむりはここに参加しているだけでなく、同サイトの管理・運営も請け負っています。

このサイトを機にかたつむりは、これまでなら自分たちでは見つけれなかったような仕事（たとえば電話の受話器掃除など）も得られるようになりました。また何よりも、サイト管理者として自分たちの存在を周りに知ってもらう機会となりました。

「存在を知ってもらうことは仕事を獲得するうえで重要。一軒一軒営業をかけて門前払いをされるより、向こうが自分たちの存在を知ってくれて何かのときに注文してくれるというふうにしたほうが、仕事が獲得しやすいように感じます」（森さん）

依頼が来れば、どんな仕事でも引き受けることにしています。たとえば、封入やデータ入力の仕事を数万件こなしてほしいといった依頼のときは、自分たちだけではこなさきれない数であったとしてもまず引き受けて、「すぎなみ仕事ねっと」の会員施設などに外注しています。

かたつむりにはほとんど利益が出ない金額で外注に出すときもありますが、「一度来た仕事は赤字覚悟でもつなぎとめて、次の受注につなげたい。まずは『かたつむりに発注すればきっとやってくれる』という信頼を得ることが第一と考えています」と森さん。これも外注できる当てがあるからできることであり、すぎなみ仕事ねっとで

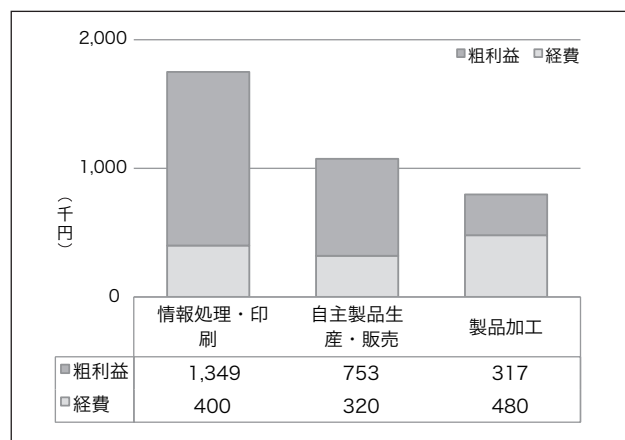
築いた関係が生きているといえます。また、かたつむりだけでなく、外注先となった施設にとっても仕事のチャンスが増える結果となっています。

毎月第2・第4土曜日は、近隣の住民の方々などを対象に、パソコン教室「パソコン茶屋えすかるご」を開いています。受講料は1回2時間まで1,500円で、以降徐々に安くなるという料金設定ですが、実はここで期待しているのも、かたつむりの存在を近所の人に知ってもらい、仕事の注文につなげるという二次効果です。

このほか、ビーズアクセサリーや、パソコンでつくったポストカードなどの自主生産品は、近隣でのイベントや、杉並区役所内でも販売しています。

各作業の工賃と仕事状況

各事業の内訳



情報処理事業（データ入力、ホームページや名刺の作成等）

▶ いろいろな注文に幅広く対応

パソコンの知識・技術のある5人の利用者が担当し、職員2人（うち1人は障害者職能訓練学校の卒業生）がサポートしています。

情報処理事業は、かたつむりにとって最も大きな収入源。材料費などのコストがかかりにくいというメリットもあります。

おこなっている業務は、企業等から依頼されたデータ入力（売り上げやエネルギー使用量などの入力）や、年賀状・名刺・チラシ作成、ホームページの作成・更新などで、平成18年度からは「すぎなみ仕事ねっと」のサイトも管理・運営しています。

平成20年度からは企業からコンスタントなデータ入力の契約が入り、収入は大きく伸びました。ただ、最初は一部作業を外注にも出していたのでコストも同時に増えています。21年度からは外注しなくてもできるようになったので、さらに収入が伸びると期待されます。

ご近所からも仕事が舞い込む可能性があるのも、地元との付き合いも大切にしています。近くのカラオケ屋さんからはカラオケコンサートのチケット作成やCDカバーのデザイン、診療所か



集中して画面に向き合うパソコン班。データ入力をする人、デザインを担当する人……と得意分野で役割分担。キーは打てなくてもマウスで鮮やかなイラストや短文作成をこなす人も。

らは診察券の作成なども受けています。

名刺の印刷は利益が比較的出ますが、一方でチラシの印刷はコピー機での印刷なのでトナー代などのコストがかかり、あまり利益にはなりません。でも、どんな仕事も引き受けることで、次のもっとよい仕事につながると期待しています。

利用者はパソコンの知識・技術があるとはいえ、障害による得意・不得意もあり、キーが打てる人は入力担当、キーは無理でもマウス操作はできるという人はデザイン担当と分けています。できる仕事のスピードや量も人により、精神障害のある人は気分の落ち込みなどにより作業が進まない日もあれば、知的障害のある人は入力は早くても打ち間違いがあることもあります。データ入力に際しては、ミスが起きないように、入力用フォームを事前に職員が分かりやすく整理したり、一緒に読み上げチェックをしたりしています。

作業は10時～16時なので、仕事が終わらなければ、職員が引継ぐこともあります。といっても、職員は必ずしもパソコンの専門家ではなく、「私は利用者に教えてもらいながらやり方を覚えていったという感じです」（森さん）と言います。

ビーズアクセサリーなどの手工芸品の自主生産

▶ ビーズアクセサリーが好評

かたつむりでは、さまざまな手工芸品を製作・販売しています。

なかでも、ビーズで作ったアクセサリーやストラップは好評。利用者の中にビーズ手芸の達人がいて、くまやパンダ、犬などの動物をモチーフにした作品や、スワロフスキー社製ビーズを使ったネックレスや指輪もつくります。作品に感心した人から、「こういうものをつくってほしい」と個別注文が来ることもあります。

このほか、さをり織り、手すきの和紙、お手玉、柄付き石けん、パソコンでデザインしたポストカードなども製作しています。

自主生産品は、近隣のイベントや「すぎなみ仕事ねっと」、また、同ネットが出店している「ポータルサイト」でも買うことができます。



噂の「ビーズの達人」がいるビーズ班。小さなビーズを一つひとつ糸に通して、最後は可愛い動物のストラップに。スワロフスキーのネックレスや指輪も作っています。

また、杉並区役所内で、平日に授産施設共同の店がオープンされており、かたつむりはそこにも第3以外の金曜日に出店しています。購入していくのは市役所を工事で訪れた人や、区役所職員など。少ない日では3,000円、多い日では25,000円もの売り上げがあります。出店している日は、製作中のメンバーも「いまどのくらい売れている？」と、店にいるメンバーからの報告を楽しみにしており、売れていると分かると歓声を上げてまた仕事に励んでいます。

このほか、新宿にある居酒屋にもビーズのストラップを置いてもらっており、ボトルキープをする客がマイボトルに下げる目印にと購入し好評です。その居酒屋の店長さんがたまたまビーズ作品を気に入ってくれたことで始まった取引ですが、いろいろなところとこうしたつき合いを築いて、販売チャンスを広げたいと考えています。



ビーズアクセサリーや、毛糸のショール、組み紐、木工製品、バッジ……などなど、さまざまな小物も製作。「ぜひ買ってくださいね」。



軽作業（チラシ封入、ラベル貼り等）

▶どんな仕事也大歓迎

チラシの封入やラベル貼りのほか、電話クリーニング（電話の受話器を掃除する仕事）、ビデオのラベルはがし、エコキャップ洗浄などの軽作業も受注しています。

このうち、電話クリーニングやエコキャップ洗浄は、「すぎなみ仕事ねっと」を通して入ってきた仕事です。

基本的には、「どんな仕事でも引き受けて、また次も仕事ができるようにする」というのがかたつむりの方針。作業が何万件もあって自分たちでこなせない量の場合は、同ねっとの会員などに外注しています。かたつむりだけでなく、ほかの施設にとっても収入を上げるチャンスとなっています。

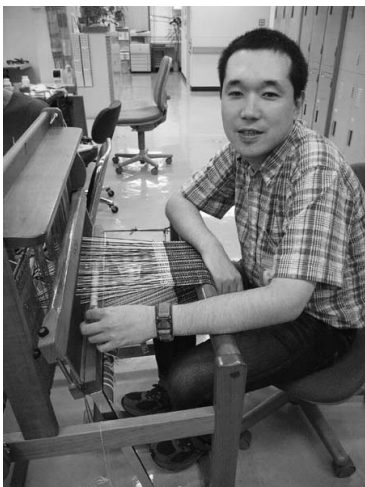
工賃がアップしたポイント

▶存在を周囲に知らせる

一軒一軒営業して回って門前払いをされるよりは、自分たちの存在をまず知ってもらって必要ときに注文が来るというようにしたほうが、仕事を得られやすいようです。「すぎなみ仕事ねっと」などを通じてかたつむりの存在を周囲に知ってもらったこと、それだけでなくパソコン教室なども開いて近隣との関係を築くなど、つき合いを広げる努力してきたことが実を結んできたといえます。

▶来た仕事は必ず引き受ける

どんなに小さな仕事や「こんなにたくさんは無理」という仕事でも引き受ける。外注してでも仕事をやり通すことで相手との信頼を築き、次もまた仕事ができるように心がけています。



「さをり織り」もヨロシク。

▶ 外注や共同受注もできるネットワークづくり

自分の施設だけでは難しい仕事でも、外注先というネットワークをもっていれば受注でき、共同受注も可能になります。その意味で「すぎなみ仕事ねっと」との出会いは大いといえます。

今後の課題

▶ 設備投資

開設した当初は、かたつむりのようにパソコン作業をおこなう施設は珍しかったものの、いまでは各家庭にすらパソコンがある時代になりました。仕事を得るには、よりレベルの高い作業ができるよう新たな設備投資も必要と考えており、そこに行政の支援などがあるとよいと思われます。

▶ 増える利用者数への対応

平成 20 年度までは収入と同時に工賃も伸びているのですが、平成 21 年度からは利用者数が 20 人に増えたため、収入は伸びても工賃は下がると予想されています。

工賃は利用者の増減によっても大きく変化します。工賃を保つためには利用者数を制限する手もありますが、そうすると今度は補助金が減るという側面もあります。どのくらいの人数バランスで運営していけばいいかが常に悩むところです。

▶ 「すぎなみ仕事ねっと」のこれから

杉並区が「すぎなみ仕事ねっと」を主催するのは平成 21 年度まで。今後も施設同士のネットワークを維持していけるのか、また、各施設がそのネットワークにどこまで運営費や人材を確保できるのかが課題です。引き続き行政からの支援が望まれるところではあります。

信頼できる企業とのパートナーシップ

基本データ

- 名称：おおやま福祉作業所 ●運営法人：社会福祉法人にりん草
- 施設長：大内みつこ ●住所：〒173-0024 板橋区大山金井町 21-1
- 電話：03-5995-6186 ●URL：http://www.nirinsou.jp/

【作業所データ】

- 開所年月日：平成元年 4 月 1 日
- 施設種別：知的障害者小規模通所授産施設
※平成 23 年 4 月より「就労継続支援 B 型事業」に移行予定

●利用者数・職員数

利用者：定員 19 人（15 歳以上の知的障害者で通所可能な人が対象）
 <現在>・身体障害者手帳：5 人（男性 5 人）・愛の手帳：19 人（男性 7 人、女性 12 人）
 ・精神保健福祉手帳 1 人：（女性 1 人）
 合計：19 人（男性 7 人、女性 12 人）

職員数：8 人（常勤 3 人、非常勤 5 人）

●作業内容

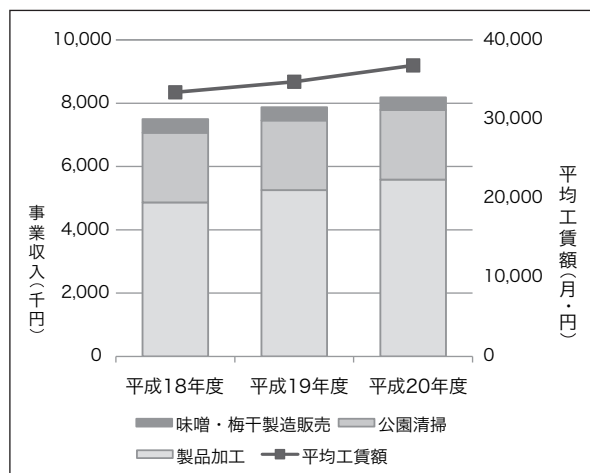
<受注>・マグネット応用製品の組み立て ・袋詰め、箱折り ・都立・区立公園の清掃
 <自主生産>・梅干（平成 2 年 6 月より） ・味噌（平成 3 年 1 月より）
 <その他>・三陸わかめの取り寄せ販売

●平均工賃の推移（1 人当たり月額）

平成 20 年度の一人当たり月額平均工賃は 36,786 円と、平成 19 年度の都における一人当たり月額平均工賃 14,704 円の 2.5 倍となっており、3 カ年続けて工賃がアップしている。

事業収入・工賃の推移

	平成 18 年度	平成 19 年度	平成 20 年度
平均工賃額（円／月）	33,374	34,697	36,786
製品加工（千円／年）	4,869	5,253	5,586
公園清掃（千円／年）	2,200	2,200	2,200
味噌・梅干製造販売（千円／年）	429	417	398
事業所全体（千円／年）	7,542	7,876	8,019
利用者数（人）	31	30	29



●工賃の決め方

- ・日給 × 出勤日数で基本給を算出。基本給にさらに係手当、皆勤手当、奨励手当、清掃手当などを合計し、利用者に支払う。
- ・日給の決め方は、評定項目に沿っておこなっている（年 2 回見直す）。

- 賞与 年 3 回（夏、冬、年度末）

「おおやま福祉作業所」は こんなところ

住宅街の中にある、おおやま福祉作業所。
「三陸わかめ・発売中」の看板も掲げられ、
近所の人が通りすがりによく買ってくれ
ます。



整理整頓・作業しやすい身だしなみで効率的に作業

「おおやま福祉作業所」は、板橋区内に3ヵ所目の作業所を立ち上げようと、板橋区手をつなぐ親の会（平成15年に社会福祉法人にりん草を設立）が平成元年4月に開設したもので、平成14年4月に現在地に移転してきました。いまの土地・建物は大家が用意・建設し、それを板橋区が借り上げているものです。最寄駅から徒歩10分程度、住宅街の中にあり、恵まれた立地条件といえます。

同作業所の主な作業は、マグネット応用製品の組み立てや、袋詰め・箱折りなど。また、板橋区から公立公園の清掃を受注しています。

また、自主生産として梅干・味噌の製造・販売を行っているほか、最近では三陸わかめの取り寄せ販売も実施しています。

ここ3年で、利用者の1人当たり平均工賃は3,000円以上アップし、平成20年度には36,786円。最も高額な人では月3万円以上（毎日来た場合）、少ない人でも月15,000円程度を得ています。

同作業所の1日の流れは、まず朝8時45分に登所して着替えを済ませ、朝礼の後、9時20分～15時40分の作業となります。途中、午前に10分間の休憩、1時間の昼食（給食）・休憩・歯磨き、午後に15分間の休憩（体操など）が入ります。休む人はほとんどおらず、毎日ほぼ全員が登所するそうです。

毎朝の朝礼は、「おはようございます！」という元気な挨拶で始まります。利用者による日直が司会を務め、今日一日の目標も決めます。「昨日と同じ作業内容であったとしても、毎日目標を考えることで、頭の刺激になる」と所長の大内みつこさんは言います。

日直は、全員の身だしなみもチェック。ハンカチやティッシュはちゃんと持参しているか、爪は伸びていないか、男性ならヒゲはちゃんとそっているかなどまで、一人ひとり見ていきます。

整えるのは身だしなみだけではありません。登所後・帰宅前には全員で館内の掃除もおこないます。こうした日課も、日々の作業効率向上に欠かせないと思うからです。

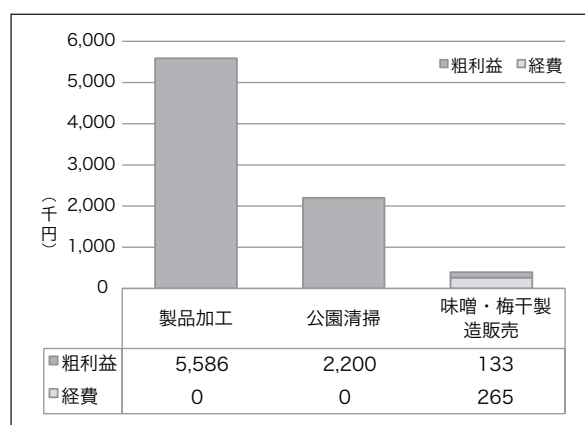
「常にきれいに片付いている場所でなければ、効率面でも質の面でもよい仕事はできません。また、作業しやすい身だしなみかどうかや、本人のその日の体調や心理状況、人間関係も仕事の効率性に大きく影響します。毎日の朝礼でお互いの様子や表情を見て、今日これからの対応を考えながら作業工程を管理していくんです。」（大内さん）。

このほか、同作業所では週1日クラブ活動も設けており、利用者は料理、レザークラフト、カラオケ、卓球、ユニホックなどの各クラブに参加しています。

また、年1回、宿泊訓練として全国各地を旅行しています。こうしたさまざまな活動を経験することも生活能力の向上につながり、ひいては作業効率の向上にもつながると考えています。

各作業の工賃と仕事状況

各事業の内訳



マグネット応用製品の組み立て

▶ 作業効率アップで信頼獲得

同作業所では開所した平成元年より、この作業を受注しています。具体的には食器棚やテレビ台などの扉に取り付けるマグネットを組み立てる作業です。

同作業所にとって最も大きな収入源ですが、最近は金融危機の影響で受注が減っています。今年前半はほとんど仕事が入らない時期もあり、一日どんな作業をすればいいか途方にくれたときもありました。

それでも、効率化アップ・納期を守ることに徹底してきた結果、受注量がもち直してきています。同作業所の仕事の確実性が評価され、優先的に仕事が入る部分もあるようです。

同作業所が扱っているマグネットの種類は約 30 種類。手先の器用さや慣れないと組み立てられないような種類もあり、扱える利用者も必然的に限られてきます。しかし、利用者の能力や経験を見ながら仕事を割り振るようにしており、全員がマグネット組み立てに何らかの形でかかわることができています。結果、手先が器用になり、今まで片マヒで苦しんでいたのに両手が使えるようになったという人もいます。

組み立てだけでなく、製品の検品もおこなうことが業者との契約になっています。もし 1 万個のマグネットを組み立てる仕事があったとして、1 つでも検品ミスをして納品してしまうと、1 万個がすべて戻ってきて一から検品をし直さなければいけません。ですから、検品ミスは絶対出さないようにと、全員に注意を促しています。なかにはミス発見などに職員顔負けの力を発揮する利用者もいます。

受注単価は、製品により高いもの・低いものがありますが、取り引きが始まって以来、その金額は変わっていません。手間がかかる割には単価が低いものについては、単価アップを相手企業に要望していますが、いまのところ単価は上がっていません。しかし、数をこなせばよい収入になるので、同作業所にとって必要不可欠な事業です。

発注する企業側も、かつては一般家庭の主婦などに発注することが多かったようですが、最近では家で内職をする人も少なくなっていること、また、一軒一軒の家庭を回って部品や設備を配布・回収するよりは、1 ヲ所にまとめて委託したほうが効率がよいということもあり、同作業所のようところに委託することが多いようです。

マグネットを組み立てるグループと、袋詰めを担当するグループ。その日の仕事内容や利用者一人ひとりの様子を見て、作業が割り振られます。



組み終わったマグネット製品は、「トレー 1 枚に何個ずつ」と決められた数ごとに並べて分かりやすくするのがルール。トレーには空き缶箱のフタを使用するとマグネットが張り付き便利。

検品が済んだ製品には、「品番〇〇」や「検品済み」などと書かれたカードを置くのも、作業効率をアップするための決まり。カードには不要になったダンボールを活用してコスト削減。



部品の収納ケースも記名しながらきちんと整理して、作業の効率化とミス防止を図ります。

袋詰め、箱折り

▶箱折りは一般的に利益が小さい

洋服の型紙をセットにして袋に入れるなどの袋詰めの作業や、菓子などの包装容器（箱）をつくる箱折りの作業も企業より受注しています。

このうち、箱折りの作業は不定期で入ってくるものなので収入としては安定せず、しかも、マグネット組み立てほどの金額にはなりません。たとえば、箱1個あたりの作業代がだいたい15円だったとして、それを400個つくったとしても6,000円にしかならないのです。

また、マグネット組み立てには利用者全員がかかわることができるのですが、箱折りについては技術的に難しい人もいます。特に、繊細な素材を用いた箱や、折るに当たって爪跡をつけないようにするなどの細かい配慮が必要な箱の場合は、難しいと判断して受注を断ることもあります。

公立公園の清掃作業

▶工賃アップに大きく貢献

平成5年より、区立公園の清掃作業を板橋区より受託しています。週1回のペースで清掃し、月に約20万円、年間にすると約220万円の収入になります。この区立公園の清掃が入ったことにより、利用者に従来より月1万円多く工賃を支払えるようになり、同作業所にとって大きな収入源となっています。

ただし、利用者によっては「外に行きたくない」という人もおり、全員が公園作業に従事できるわけではありません。また、利用者も年々高齢化しており、体力が低下しているという現実もあります。特に除草などのハードな作業は、体力や根気が続かないという人もいます。

でも、マグネット作業のような室内作業と違って外に出て働くことができるので、気分転換になり仕事にもメリハリがつきます。この結果、マグネット組み立てに対する意欲もまた高まります。

梅干・味噌の自主生産

▶大量生産は困難でも近所で好評

平成2年6月より梅干、平成3年1月より味噌の自主生産・販売も行っています。

梅干、味噌とも約80kgずつつくります。いずれも自家製で、つくり方は周囲からのアドバイスや、所長・大山さんの経験などに基つき少しずつ改良してきました。梅干には、高品質と評判の南高梅と、赤穂の天塩を使っています。

販売は、作業所まつりなどのイベントでおこないますが、毎年またたく間に完売します。すでに地元では「おおやまの梅干・味噌」として親しまれ、一つの看板商品となっており、この梅干

や味噌を楽しみにしてくれている近所の人たちのために、必ずつくることにしています。

売り切れたからといってそれ以上はつくらず、来年の製造時期まで待ちます。材料が手に入りやすい季節が限られているからというもありますが、マグネット組み立てなどの受注作業と併せて梅干・味噌をつくるという作業は大変だからです。特に、マグネットの受注が急に増えたりすると、その納期を間に合わせながら梅干・味噌もつくっていかねばなりませんし、一方では梅干も味噌も、つくるのに毎日の管理や手間ひまが必要となります。



南高梅と赤穂の天塩だけでつくった梅干と、自家製味噌は、「おおやまの梅干・味噌」として近所で評判。

その他事業

• 三陸わかめの取り寄せ販売

他の作業所で「三陸わかめを販売して好評を得ている」という話を聞き、おおやま作業所でも最近、三陸わかめの販売を始めました。

わかめは他県の卸業者から取り寄せています。同事業所の玄関で「三陸わかめ・販売中」という看板を掲げ、それを見て近所の人や通りがかりの人が買っていってくれます。

始めてみると確かに好評で、「三陸わかめ・売り切れました」という看板を掲げる日も。

すでにパッケージされているわかめを取り寄せて売るだけなので、手間もかからないというのもメリットです。

• ペットボトルのキャップの仕分け

金融危機によりマグネット組み立ての受注が激減した際、少しでも収入の足しになればと、ペットボトルのキャップの回収・仕分けも始めました。

作業所の玄関先にキャップの回収箱を設置しており、通りがかりの近所の人でもキャップを入れていってくれます。

工賃がアップしたポイント

▶ 業者との信頼関係づくり

受注事業においては、納期を守る確実な仕事で企業との信頼関係を築き、仕事が多く得られるようにしてきました。

▶ 作業しやすい環境で効率アップ

「効率よく、質もよい仕事をこなすには、作業環境がきれいであってこそ」というのが同作業所の考えです。ごちゃごちゃとした環境では、ミスも発見しにくくなってしまいます。登所後と帰宅前の掃除は欠かさないのはもちろん、作業中でも、常に整理整頓や片付けをしながら仕事を進めていきます。

また、現在の作業状況が一目で分かるような工夫も施しています。たとえば、マグネットという商品特性を生かし、缶でできた空き箱のフタなどをトレー代わりにして、完成したマグネットを貼り付けて収納したり、つくった部品の数が見えやすいように、一つのトレーにいくつマグネットを収納するか、そのトレーを何個まで積むかも全員の共通ルールとしています。さらに、「ここまでで〇個ある」「検品済み」などのカードを置いて、今の作業状況が誰からも分かるようにしています。

▶ 一人ひとりの様子を「先読み」しての工程管理

利用者の作業の様子を見ていて、「この作業はそろそろ終わりそうだな」と思ったら、次は何を任せるか、常にそのときの様子や流れを見て、「先読み」しながら仕事を割り振り、作業を効率的に進めています。

また、利用者の体調や気分・集中力（すぐ飽きたり疲れたりしないかどうか等）も異なるため、そうした部分も見極めつつ、作業内容に変化やメリハリをつけていることも、「早く正確な」作業につながっています。

▶ 区立公園の清掃の受託

平成5年より区立公園の清掃作業を受託しており、月で20万円ほどの収入になります。清掃業務の受託はコスト（原価）がかからないので、収入がそのまま工賃になります。

発注元が行政ということもあってたいへん安定した業務となっており、工賃アップの下支えの機能を果たしています。

▶ 作業へのモチベーションを上げる工夫

その1・手本を見せる

職員がまじめに仕事をしている姿を見せることも、利用者のモチベーションアップのために重要と捉えています。作業に気が乗らない様子の利用者には、「ここには何をしに来ているんだっけ？」と聞き、「作業をしに来ている」という答えが返ってくれば、「そうだよね。あの人（職員）

を見ると、何をしている？」「まじめに作業をしている」「じゃあ、あなたも同じようにやらないとね」と、ここでの目的を再確認させながら作業に向き直ってもらいます。

一方で、よくできたら「ほめる」ということも、技術や意欲を伸ばすため大切にしています。

その2・細分化した評価項目

一人ひとりの工賃は、まず日給×出勤日数で基本給を算出。基本給にさらに係手当、皆勤手当、奨励手当、清掃手当などをプラスし、その合計を利用者に支払います。

係手当にはたくさんの評価項目があり、たとえば月めくりカレンダー（複数ある）をめくれば月100円、朝礼の司会進行を務めれば月700円、ゴミ出しをすれば月700円がもらえるというようになっています。

このほか、年3回（夏季、冬季、年度末）に賞与も支給しています。

こうした一つひとつの評価も、利用者のモチベーションアップにつながっています。

その3・お金で人との交流が広がることを学ぶ

同作業所では、手に入れた工賃で実際に買い物をすることや、お金の使い方、人とのやりとりを学ぶことも大切にしています。たとえば、年1回開催している旅行では、訪れた地の一流の食べ物や宿を満喫して「本物」を見る目を養うと同時に、家族へのお土産を買う際にも自分で選んで買うこと、お金を上手に使うこと、買い物を通しての相手とのコミュニケーションや交流を学びます。

こうした結果、電車に乗って遠方に出かけることが趣味の利用者は、稼いだ工賃で切符を買うことを覚え、電車の旅はもちろん、そこでの人との出会いも楽しめるようになりました。

お金を通して自分の世界が広がるという体験が、その後の作業意欲の向上にもつながっています。

今後の課題

▶ 利用者の高齢化

利用者の中には、30歳代後半～40歳あたりを過ぎると早くも体力や視力等が衰え、これまでできたことができなくなる人もいます。工賃が下がらないように、まだできることや得意なことに専念してもらうなどの配慮をしていますが、利用者の高齢化にどう対応するかが課題です。

▶ 受注の開拓・営業職員の確保

同作業所の主な事業はマグネットの組み立てですが、昨今の金融危機のように仕事が入らないときがあると、作業所全体の仕事量も収入も一気に下がってしまうという危険があります。新たな受注先の開拓や営業活動も必要といえます。

とはいえ、現在は特に営業活動のようなことはしておらず、また営業に精通する職員もいないため、そうした職員の配置や人件費補助も求められます。

今後さらに工賃アップを図るには、パートなども雇って作業効率を上げるのも一つの方策と考え

られますが、同作業所としてはその案にはいまのところ消極的です。というのも、30種類もあるマグネットの組み立てを覚えたり、検品できるようになるまでにはそれなりに時間がかかり、むしろ、利用者のほうが慣れている場合もあるからです。また、パートが増えるとパート同士でおしゃべりしながらの作業になってしまう恐れもあると考えています。

公園清掃などの行政からの事業委託は今後も増やしていきたいところです。ただし、公園の清掃事業までは受注できても、緑化事業まで受注するとなると、草と花の区別がつかない利用者が誤って花を切ってしまう場合もあるので、仕事を選ぶ必要があります。もし、あらたに緑化専門の職員を補助などで雇うことができれば、そうした作業の受託も可能になると考えています。

伝統工芸・藍染めへの こだわりを大事にしつつ いかに工賃を上げるかが課題

基本データ

- 名称：藍工房
- 運営法人：社会福祉法人藍
- 施設長：近藤倫絵
- 住所：〒154-0023 世田谷区若林 5-2-9 三喜ビル
- 電話：03-3412-1366
- URL：<http://www.aikobo.or.jp/>

【作業所データ】平成 21 年時点

- 開所年月日：昭和 58 年
- 施設種別：就労継続支援 B 型

●利用者数・職員数

利用者：定員 22 人（登録 35 人：男性 8 人、女性 27 人）

・愛の手帳 8 人（男性 2 人、女性 6 人）

・精神保健福祉手帳（手帳なし含む）24 人（男性 6 人、女性 18 人）

職員：8 人

●作業内容

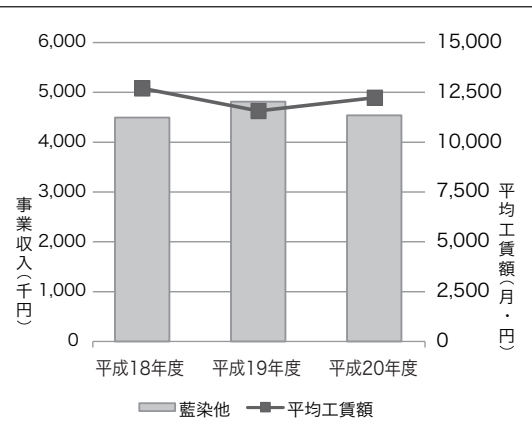
<自主生産>・藍染め ・ 刺し子 ・ 織り（さをり織り） ・ 組紐 ・ 陶芸

●事業収入と平均工賃の推移

平成 20 年度の一人当たり月額平均工賃は平成 19 年度の都における月額平均工賃 14,704 円よりも下回っている。

	平成 18 年度	平成 19 年度	平成 20 年度
平均工賃額（円／月）	12,709	11,570	12,234
藍染他（千円／年）	4,496	4,817	4,540
事業所全体（千円／年）	4,496	4,817	4,540
利用者数（人）	31	30	29

事業収入・工賃の推移



●工賃の決め方

・売り上げが上がったら、基本的に商品の定価の 3 割を引いた金額を工賃として製作した本人

に支払っている。材料費が高い商品の場合は、5 割引く商品もある。

●賞与 なし

「藍工房」は こんなところ

世田谷線・若林駅のほど近く、通りに
面したビルに「藍工房」はあります。



藍染めの作業所。染料液の入った瓶がどっしりと置
かれています。



藍染めを中心に展開

「藍工房」は、その名のとおり藍染めを主な事業とする、知的・精神障害のある人のための施設です。場所は世田谷区・若林駅にほど近いビルで、部屋に入ると藍の染料が入った大きな瓶（かめ）が目飛び込んできます。

活動時間は月～金の9時から16時まで。利用者たちは藍染め製品（Tシャツ、ショール、バッグなど）の生産はもちろん、刺し子、組み紐、さらには織りなどもおこなっており、集中した表情で作業に臨んでいます。

利用登録者数は現在35人。そのうち27人が女性で、基本的にものづくりが好きという人たちが集まっています。主に世田谷区、目黒区など近隣の人ですが、なかには23区以外から来ている人もいます。

藍工房が設立されたのは昭和58年。代表の竹ノ内睦子さんが、「働きたくても働く場所がない」と訴える障害者に会い、「日本の伝統工芸である藍染めで、障害者の働く場所をつくろう」と思い立ったのがきっかけでした。最初は6畳1間を借りてのささやかなスタートでしたが、次第に活動規模は広がり、平成15年には社会福祉



Tシャツや、バッグや巾着、箸袋など、さまざまな作品をつくっています。

法人藍を設立するに至りました。

つくった製品は、近隣のショップや、同じ社会福祉法人藍の傘下にある共同作業所 藍 Cafe & Gallery（フレンチ・レストラン「アンシェーヌ藍」）のギャラリーなどで売っています。

また、アーティストとのコラボレーションによる製作も試みており、関連のイベントやショップなどでも製品は扱われています。

一方、新宿では毎年7月ごろに6日間、藍工房主催の展示販売会もおこなっています。このイベントでは外部からの出展協力者も募っており、各出展者から売り上げの30%はイベントの運営費にあてられます。ここでの売り上げは毎年約120万円（工賃総額では約70万円）にもなり、必要経費を差し引き、利用者工賃として還元しています。藍工房の年間売り上げの3分の1を占めるという大きなものです。ただし、今年は金融危機の影響か、売り上げが大きく落ち込む結果となってしまいました。

このほか、平成16年からフランス、イギリス、トルコ、オーストラリア、中国、スウェーデンなど世界各地を回っての作品展も開催しており、今年はロシアで開催しました。藍工房の作品を海外で紹介することも竹ノ内代表が掲げてきた目標の一つで、利用者も開催を毎回楽しみにしています。

今は職員の人手の問題もあり、販路・受注拡大のための営業活動は十分にできませんが、藍工房のこうした活動を知って生産依頼をしてくれる企業・団体もあります。

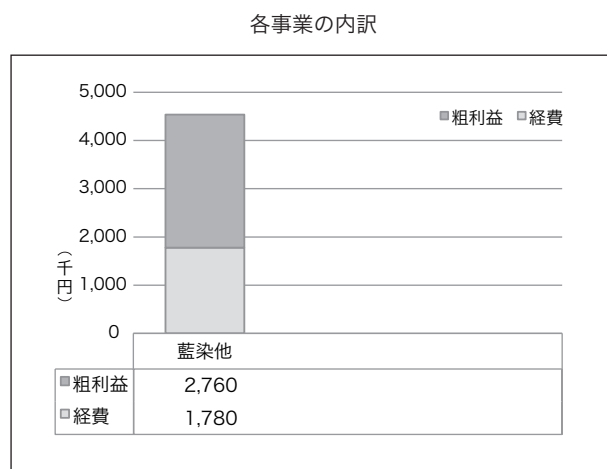


社会貢献や環境問題に関する広報・啓蒙活動をおこなうNPOの企画で実現したホアキン・ペラオ氏デザインの雲をモチーフとしたTシャツ。山中湖の関連ショップでも販売しています。



組み紐は、飾りや部品を付けてストラップなどに。「常に市場チェックして、どんな商品が売れ筋か見ながらデザインしているんですよ」と職員さん。

各作業の工賃と仕事状況



藍染め、刺し子、組み紐、織り、アクセサリー作り、陶芸など

▶一つひとつ手づくりだからこそ

海外展示会の開催やアーティストとのコラボレーションなど、幅広い活躍を見せる藍工房ですが、工賃は伸び悩んでいます。

理由としてはまず、製品自体が大量生産できるようなものではなく、つくり手一人ひとりの作品性を重視した工芸品であるということがあげられます。工賃も利用者全員で均等に分けるというスタイルではなく、商品が売れたら製作した本人に、経費を引いた分だけ支払うという形をとっています。

「週3回は作業に通うことを原則としていますが、体調により休んでしまう人もいます。そのため作品がつかなくて工賃が400円程度という人もいれば、毎日通って月額20,000～30,000円くらいを手に入れている人もいます」と、施設長の近藤倫絵さんは説明します。自分でつくった作品が気に入って自分で購入している人や、新宿での展示販売会の月には、たくさん作品が売れて10万円近い工賃を手に入れる人もいます。

大量生産できないもう一つの理由が、「こういうものがつくりたい」と作品に対する利用者のこだわりが強いということです。職員もその部分は大切にしたいと考えており、そのため、企業や団体から生産依頼が入っても、利用者がどうしてもつくりたくないもの・対応できないものだったり、納期までの時間が十分でない場合などは、やむを得ず断わる場合もあります。

加えて、藍染め製品そのものが、つくるのに手間がかかるという点があります。1枚染め上げるにも、布を染料に3分浸けたら、6分空気中で酸化させて……といった作業を繰り返さなければいけませんし、しかもムラなく均等に染めていくのは注意を要します。染料を含んだ布は重いので重労働でもあり、技術はもちろん、体力も必要です。それだけに職員の手が必要となることもあります。と同時にあくまでも利用者主体で作業を進めていくという配慮が求められます。

また、藍の染料は発酵物、つまり生きていますものなので、その管理も大変です。藍工房では「すくも」と呼ばれるタデアイの発酵物を取り寄せ、藍染めをおこなっていますが、染料を長く保存



一織り一織り、丁寧に織り上げる「さをり織り」。できあがった布は、ボランティアが、バッグや写真立てなどの小物にアレンジ。「布それぞれの色や持ち味を生かすようにデザインしています」とボランティアさん。

させるため1日に染める量を制限したり、休ませたり、また夏の間はエアコンを回したままにしなければならず、電気代もかさみます。

藍以上に大変なのは織りです。1枚つくり上げるのに一織り一織りしなければならず、これもまた時間も根気も要る作業です。

染め上がったたり織り上がったたりした布を、バッグやコースターなどの小物に縫製していくのは主に職員やボランティアたちで、特に縫製作業は時間と手間と技術を要します。

手間を要する分、作品の売値は高く設定したいところですが、そうすると今度は売れなくなる恐れが出てくるので悩むところです。ただ、その一方で「ブランドショップなどに卸している製品は高くても売れているので、値段の判断は難しい」とも、近藤さんは言います。

ただ、手間がかかるとはいえ、一つの作品を完成させたときの利用者のやりがいや達成感は大きく、そこはやはり手づくりの作品でしか味わえないよさといえます。

工賃が伸び悩んでいる理由

▶ 工芸品という難しさ

藍工房の製品は手間や労力を要する手づくり品であり、作品に対して利用者もこだわりをもっています。

そうしたものである以上、外部から生産依頼が来たとしても必ずしも応え切れるものではなく、受注や販路拡大のための営業活動なども特におこなっていません。また、そのような余裕も職員にはないというのが現状です。

今後の課題

▶ 大量受注時の対処策

一度にたくさん生産できる製品ではないので、大量受注が入った場合にどうしたら対処でき、かつ工賃が上げられるかを、利用者のこだわりも尊重しつつアドバイスしてくれるコンサルタントなどがほしいと考えています。

▶ 会計専門職員の配置

職員の手が回らないせいもあり、一般企業のように「いつ・どのくらいの製品をつくり、在庫がいまどのくらいあるか」までを十分に管理しきれない状況です。

また、社会福祉法人の会計処理も、一般企業に比べ分かりにくい部分があります。会計や経営に精通した職員が、行政の補助などで配置できるとよいと感じています。

パンづくりとカフェ運営 収入は伸びているも コストや手間は大きく

基本データ

- 名称：食工房ゆいのもり
- 運営法人：社会福祉法人ゆいのもり福祉協会
- 施設長：嶋田敦子 ●住所：〒196-0011 昭島市上川原町 1-9-15
- 電話：042-542-5160 ●URL：<http://www7a.biglobe.ne.jp/~yuinomori/index.html>

【施設データ】平成 21 年時点

- 開所年月日：平成 15 年 4 月 1 日
- 施設種別：精神障害者通所授産施設
※平成 22 年 4 月に自立支援法へ移行予定

●利用者数・職員数

利用者：定員 28 人（登録 32 人：男性 16 人、女性 16 人）
 ・身体障害者手帳 2 人（男性 2 人） ・愛の手帳 3 人（男性 2 人、女性 1 人）
 ・精神保健福祉手帳（手帳なし含む）27 人（男性 12 人、女性 15 人）
 職員：6 人

●作業内容

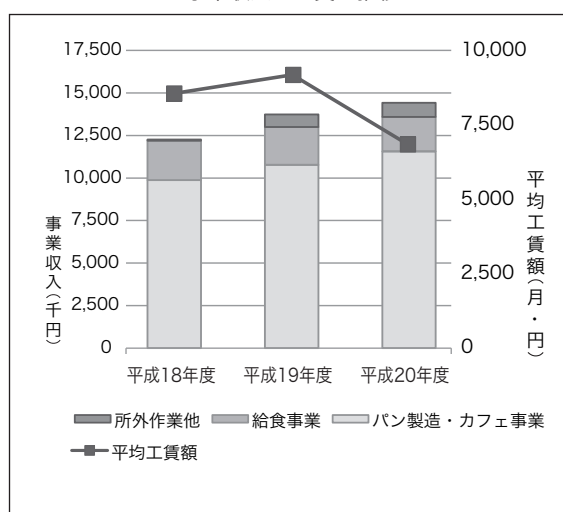
<自主生産>・パンカフェ事業（パン製造、カフェテリア運営） ・給食事業（自家用）
 <受注>・所外事業（物流センターでの作業） ・内職作業

●事業収入と平均工賃の推移

平成 20 年度の一人当たり月額平均工賃は 6,838 円と、平成 19 年度の都における一人当たり月額平均工賃 14,704 円を下回り、工賃がやや低迷している

	平成 18 年度	平成 19 年度	平成 20 年度
平均工賃額（円／月）	8,552	9,178	6,838
パン製造・カフェ事業（千円／年）	9,870	10,775	11,566
給食事業（千円／年）	2,322	2,226	2,023
所外作業他（千円／年）	68	728	822
事業所全体（千円／年）	12,221	13,617	14,421
利用者数（人）	31	30	29

事業収入・工賃の推移



●工賃の決め方

- ・一般 240 円、所外 360 ～ 380 円
- ・1 カ月勤務シフト達成良好者に手当あり

●賞与 年 2 回利益に応じて支給

「食工房ゆいのもり」は こんなところ

ウッディーな外観が目を引く「食工房
ゆいのもり」。昭島駅から徒歩 8 分の通
り沿いにあります。



国産小麦 100%でつくるパンとカフェ

昭島駅から徒歩 8 分の通り沿いにある、ほっと落ち着く雰囲気のカフェテリア。中に入ると、パンの香ばしい香りがいっぱいに出迎えてくれ、大きな窓ガラスからは程よく光が差し込んで外の緑が目映えます。奥の厨房では、利用者たちがパンづくりや販売の準備に忙しくしています。

食工房ゆいのもりは、国産小麦 100%と一部天然酵母でパンをつくとともに、有機栽培コーヒーも飲めるカフェテリアを運営する精神障害者通所授産施設です。平成 15 年にオープンしました。

運営法人である「ゆいのもり福祉協会」は、昭和 62 年に市民の手で精神障害者の作業所をつくろうとする運動から始まったもので、平成 14 年に現法人となりました。食工房ゆいのもりのほかにも 2 カ所の共同作業所を昭島市内で運営しています。

パンの製造そのものは、食工房ゆいのもりが共同作業所としてオープンした平成 5 年から始めたものです。最初につくって配送するだけの販売方法でしたが、いつかはカフェテリアをもちたいというのがかねてからの目標で、平成 15 年に現在地にカフェをオープンするとともに通所授産施設になりました。

自主生産であるパン製造・カフェテリア運営のほかに、受注事業として内職と、市



店内に入ったとたん、パンの香ばしい香りがいっぱいに出迎えます。



大きな窓から外の緑や人通りが楽しめる、落ち着いた店内。こうした設計デザインも、皆で相談しながら考えました。

内物流センターに出かけての所外作業もおこなっています。

「いろいろなよい体験を繰り返しできる場にして、将来の就職にもつなげられるようにしたい」と施設長の嶋田敦子さんは言います。

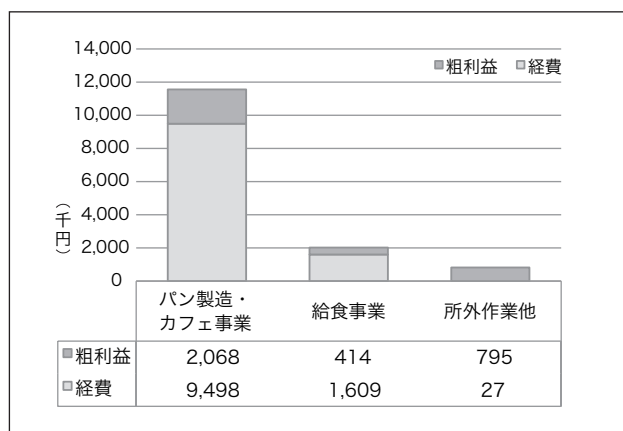
しかし、食工房ゆいのもりの工賃は都の平均工賃を下回っており、また平成 20 年度には落ち込んでいます。大きな理由としては、パン製造が収入の割にはコストがかかること、また、通所希望者が近年増えており、受け入れの結果、一人当たりの作業時間が減っているということもあげられます。さらに、精神障害者の平均通所率は 6 割と言われているように、「今日は休みたい」と突然休む人もいるので、計画通りに作業が行きにくいということもあります。

「利用者の視点から、利用者の力量に応じて安心して取り組める作業を、安定的に提供できるようにするのが課題」とも言います。

このほか同法人では、看護学校および、福祉系学校の実習生を受け入れたり、精神障害者について学ぶ地域の公開講座や勉強会に、利用者自身が講師として出向くなどして、地域での精神障害者の理解促進・暮らしの実現に取り組んでいます。

各作業の工賃と仕事状況

各事業の内訳



パンカフェ事業

▶収入は多いがコストや手間もかかる

パン製造・販売は、最初に共同作業所として食工房ゆいのもりを開設した平成 5 年に始まりました。現施設長の嶋田さんが当時、地域のためにパンで何かをしたいと、学校に通ってプロのパンづくりの勉強をしていたことがきっかけです。当初は配送だけのサービスでしたが、その後、平成 15 年にはカフェテリアももつ通所授産施設となりました。

パンは国産小麦を 100% 使用し、一部は天然酵母を使用しています。店内カフェテリアではこれらのパンと有機栽培のコーヒー（ドリンクバー）が味わえます。車が停めにくい通り沿いに



パンは国産小麦を 100%、一部には天然酵母を使用。



国分寺の人気喫茶店にも卸しているパン。おいしそうですねと言うと、「本当においしいんですよ」と利用者もオススメ。

面しているためか、大量に集客があるというわけではないのですが、小さな子どもをつれた女性やお年寄りなど、近隣の人が多く来店します。

パンは国分寺市内の人気喫茶店にも卸しており、好評で、これがゆいのもりのパン収入全体の大きな部分を占めています。取り引きが始まったのは、喫茶店オープン時に、東京都社会福祉協議会が作成する作業所の自主生産品パンフレットをたまたま目にして声をかけてくれたのがきっかけでした。

このほか、作業所だった平成 7 年頃から、パンを近隣の保育園の給食としても納品する事業や、契約している共同購入グループにも納品する事業をおこなっています。

しかし、売り上げ自体は伸びているのですが、全体の工賃は平成 20 年度に落ちています。

その理由としては、同年度にカフェ等の改装工事をして 1 ヶ月ほど休業したことや、パンカフェ事業を円滑に進めるため製造、および販売等でパート職員を授産会計で雇用したことがあげられます。

パンカフェ事業は地域に喜ばれるものの、一方ではコストがかかり、朝早くから出勤しなければならないなど重労働でもあります。職員は早い人では朝 5 時半から出勤して、9 時に来る通所者を待ちます。結局、日中はパン製造・販売の仕事でいっぱいになってしまい、利用者の生活支援・相談支援やそれにかかる事務はパン事業の終わった後になってしまうというのが悩みどころです。念願のカフェテリアをオープンしたのはよいとはいえ、利用者の状態を考えると、パンの注文やカフェテリアの来客がこれ以上たくさんあっても対応できない現状です。



奥の厨房では、小麦粉をふるいにかけてたり、つくったパンを袋に詰めたりと作業が進んでいます。

「職員が生活支援・相談支援に専念できるようにするためにも、授産事業に携わる専属職員を確保して任せられるようにできればよいと考えている」と嶋田さんと言います。

給食事業

▶ 通所者のための自家用

通所者のための給食(昼食)をつくることも自主生産事業としておこなっています。基本的にパート1名が調理し、通所者1人が盛りつけを担当しています。

通所者にはひとり暮らしの人が多いため、この食事で少しでも栄養バランスをとってもらえるようにと、野菜は多め、塩分は控えめの食事を心がけています。

所外事業、内職

▶ 外の社会に慣れる機会に

平成19年からは、市内にある企業の物流センターに出かけ、食堂やトイレの清掃、箱をつくったり、つぶしたりする作業を受注しています。所外での活動ですが、ここで挨拶することを学んだり、だんだん体力もついてきています。外の社会に慣れる機会になっており、その点で所外事業に取り組んでよかったと食工房ゆいのもりは考えています。

また、食工房ゆいのもりの2階で、医療関連商品のシール貼りなどの内職もしています。

工賃が伸び悩んでいる理由

▶ コストや手間がかかる事業

パン製造・販売の収入自体は伸びているのです。そもそもコストや人の手間もかかる仕事だといえ、粗利益率も 20%程度と低くなっています。

▶ 利用者数の増加

近年、利用希望者が増加しています。受け入れの結果、一人当たりの作業時間が減り、工賃も減るということになっています。

▶ 精神障害者の出勤率は 6 割

精神障害者の出勤率は 6 割といわれるように、突然「今日は休む」という人もいて、作業が計画通りにいきにくい部分もあります。

今後の課題

▶ 専門職員の確保

職員が利用者の生活支援・相談支援に専念できるよう、自主生産専門の職員を確保して工賃アップも図ることが望まれます。

▶ 利用者の力量に応じた安定的な作業

利用者の視点から、利用者の力量に応じて安心して取り組める作業を、安定的に提供できるようにするのが課題といえます。

多様なエコ・リサイクル事業の 試みに取り組む

身体障害者更生施設（内部障害） 浅川園
（運営）社会福祉法人 東京玉葉会

東京都八王子市川口町にある浅川園は、入所 50 名、通所 12 名の身体障害者更生施設（内部障害）。

平成 19 年度から始めている「エコ・リサイクル」事業。その代表的なものは、ハンガーなどのスーパーから出たプラスチック廃棄物の分別やパチンコ台の解体・分別、紙袋からビニールや繊維を除去するといったもので、それ以外にも空き缶・ペットボトルのリサイクル事業や、八王子という場所柄、近隣に大学が多いことから、年度末に大量に排出される紙類の引き取りが行われています。

パチンコのリサイクルではパチンコ台からプラスチック部品や金属、電子パーツを分離し、さらに電子パーツを基盤や I C チップなどに分解していきます。また、プラスチックのハンガーのリサイクルでは、同一種類の資源に分別することが仕事になります。同じハンガーでも、材質で 4 種類、形状では 10 種類にも分かります。これを見た目や叩いた時の音、触った時の感触、重さなどで分類していきます。この分別には熟練を要しますが、一度慣れてしまうと瞬時に材質を見分けることができてきます。慣れた人の作業の手早さはまるで神業のようです。

このように浅川園では、多様な素材の複雑な分別作業が行われており、こうした瞬時の判断が必要な作業や、あるいは紙袋からの繊維の除去といったきめ細かい手作業は、知的障害をもった人にはなかなか困難なことから、内部障害という障害特性を生かした作業になっています。

また一度に大量に持ち込まれることが多いリサイクル事業にとって物を保管できる場所の確保も重要で、ここでも郊外に立地する浅川園の広い敷地が生かされています。

リサイクル事業では、そのままでは資源化されないか、また資源化するためには大変な手間がかかるものが多くあります。このことは逆に、分別して均質な材料に集約すれば捨てるものに新たな価値が生まれるということです。現状では、多くの資源が十分にリサイクルされずに産業廃棄物として海外に流れ、そこでの二次的な汚染が深刻化する状況にもなっています。知恵を絞ってリサイクル可能なものをどんどん増やしていけば、リサイクル事業は社会的な要請の流れの中で社会貢献を兼ねた大きな事業に育っていく可能性があります。

さらに、リサイクル事業には、仕事量が確保されている一方で納期がないという大きなメリットもあります。また単価も他の軽作業と大きく変わりません。

リサイクル事業はノウハウさえ確立すれば、全国どこでも同様のシステムで事業化することができます。浅川園の試みに期待したいと思います。

〒 193-0801
東京都八王子市川口町 1543-1
042-654-4043



パチンコパーツ



分別前のハンガー

落ち着いた雰囲気の店内で フレンチ料理を優雅に楽しむ

レストラン アンシェーヌ藍
(運営) 社会福祉法人 藍

「レストラン アンシェーヌ藍」は、世田谷区・三軒茶屋駅から徒歩からほど近くにあるフレンチ・レストラン。一歩中に入ると落ち着いた雰囲気の内が開け、各テーブルに添えられた花も来た客の心を和ませます。

実はこのレストラン、本文でも紹介した「藍工房」を運営する社会福祉法人藍がオープンしている共同作業所だ。料理を手がけるのは東京會館で38年務めた一流シェフ・尾原寛さんで、盛り付けや接客などをおこなうのは精神などに障害のある人たちです。でも、一見そうとは分かりません。

もともとこの店舗では13年前からカフェや和食のランチをしていたのですが、同法人の代表である竹ノ内睦子さんが本格的なフレンチ・レストランをやりたい常々考えており、このほどリニューアル・オープンしたのでした。

藍染めからスタートした法人だけに、店の中にはさりげなく藍染めのカーテンやクッションなどが添えられ、それが洋風の店内になぜか絶妙にマッチしています。藍染め作品を購入できるギャラリーもあります。

また、壁にはパリの街並みを描いた風景画も数多く飾られ、店の雰囲気をさらに盛り上げています。この風景画を描き、さらに店内のデザインも無償で考えてくれたのは、これまでも藍工房の藍染めで作品をつくってくれたりしたアーティストの中西繁さんです。

現在、精神などに障害のあるメンバーは19人おり、交代で店に来ています。

シックな黒のスーツで客を出迎え、

「フレンチはゆっくりとしたペースで楽しむものですし、お客様もそうしたお食事を期待してお越しになる。ですから、メンバーも慌てたり焦ったりせずに料理出しや接客がしやすい。それもフレンチを選択した良さだといえます」とマネージャーの藤原憲之さんは説明します。

一流のフレンチが楽しめる上に、おしゃれな店の雰囲気……近隣にこうした店はほかにあまりないことともあいまって、オープンからわずかで早くも好評を博しています。工賃も高く、多い人では月9万円にもなるとか。

「より皆様に愛されるお店になって、やがてはメンバーに普通の企業と同じくらいのお給料が出せるようになればと思っています」(藤原さん)

〒154-0024

世田谷区三軒茶屋1-36-8 由上ビル2階

TEL 03-5430-3671

【Restaurant ancienne 藍 (レストラン アンシェーヌ藍)】

URL: <http://www.ancienne-ai.aikobo.or.jp/>



シックで落ち着いた雰囲気の内。店名にある「アンシェーヌ」は、仏語で「伝統的・古典的」の意味



ランチには自家製ケーキと、コーヒー or 紅茶が付きます

施設に事業を発注して学んだこと

パルシステム生活協同組合連合会・エコサポート

授産事業で常に大きな課題となっているのは、安定的な業務の受注です。今日の不景気で受注業務の減少が課題となっていますが、一方で業務を発注したいと考えている企業や団体も多くあります。

ここでとりあげるのは、東京都の生活協同組合パルシステムの例です。パルシステムでは、2007年度から子会社エコサポートを通じて千葉県内にある障害者就労施設へ縫製やプリントの作業依頼を行い2年間で計5,800枚の業務用のエプロンを製造しました。

エプロン作成は余った制服の生地が転用・転売ができず、廃棄にもコストがかかるという事情から発案されましたが、最初の難関は、業務を発注しようとしてもどこに話を持っていればよいか分からないことだった、とエコサポートの小柳専務は話してくれました。

制服の生地は伸縮性があり、加工には技術を要する。また量の問題もあります。加工できる施設がなかなか決まらず、生協で福祉活動をしている組合員に情報を流しながら、東京、埼玉と探し回ってようやく千葉のNPO法人千葉県障害者就労事業振興センターにたどりつきました。このセンターは、障害者就労施設で製作される商品や受注のコーディネートを行っている団体で、残念ながら東京ではこうした団体の情報は届かなかったといえます。

次に直面したのは質の問題です。見本と違った製品が作られたりなかなか希望するような質が確保されません。また検針機の導入やマチ針の数のチェックなど安全に気を使う事も多かったといえます。

生協としてはこれからも、業務の委託などを通じて社会的な貢献を積極的に行っていきたいと考えています。そして、その場合は商品価値のあるものの制作を適正な料金で委託したいと考えていますが、まだいくつものハードルを感じています。それはやはり、施設の側に納期に合わせるとか商品の質を確保するといった観念がまだまだ乏しいということです。

こうした中、生協にとっては授産事業の事情を理解できたことが大きな成果だったと小柳さんはいいます。福祉施設と付き合うためには時間的な余裕が不可欠であり、またそうした事情に対しする生協内でのコンセンサスも求められます。実際に納期がずれていったりするとせっかくの社会貢献であっても今回は見送ろうというようなことになってしまいがちと小柳さんは心配します。

生協では、ユーザー側のコーディネーター機能を強化して共同で質の高い商品を作り出していきたいと考えています。きめ細かい対応を行えばユーザーのニーズに合わせた少量多品種の商品開発も可能となるかもしれないと小柳さんはいいます。

生協のように、もっと社会貢献をしたいと考えている企業や団体は多くあります。そんなニーズをつなげるための相互理解と事業を推進するコーディネーターの機能が求められています。

株式会社エコサポート

(パルシステム生活協同組合連合会の子会社)

〒112-0012

東京都文京区大塚 5-9-2 新大塚プラザビル 8F

※「パルシステム生活協同組合連合会（略称：パルシステム連合会）」は、1都8県の10の地域生協の事業連合組織。事業連合傘下の生協の組合員数は1,200,000人、事業高2000億円。

※2009年5月、パルシステムは、NPO法人千葉県障害者就労事業振興センターから表彰された。



完成した業務用エプロン